

2026年度大学院博士前期課程一般入学試験（第Ⅰ期）問題

研 究 科 名	科 目 名
文学研究科 人文学専攻 仏教学専修	選択問題

(1) 次の問題のいずれかを選択して解答してください。

- ① 「三法印」の意味について詳しく説明してください。
- ② 『摩訶止観』に説かれる「一念三千」の思想的背景とその構造について詳しく説明してください。

(2) 次の項目のうち4つ選び、それぞれ簡潔に説明してください。

- ① 空海
- ② ヴァスバンドゥ（世親）
- ③ 像法
- ④ 『肇論』
- ⑤ 三階教
- ⑥ 四悉檀
- ⑦ 『阿含経』
- ⑧ 慧思（南岳大師）
- ⑨ 神仏習合
- ⑩ 『立正安国論』

解答または解答例：
Answer Keys or Examples：

- (1) ①
三法印とは、仏教の教理の特徴を示す三つのしるしのことで、「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」の三つをいう。まず「諸行無常」とは、あらゆる現象は変化してやむことがないこと、常住することなく生滅変化することをいう。「諸法無我」とは、いかなる存在にも不変の本質、すなわち固定的・実体的なアートマンがないことをいう。そして「涅槃寂靜」とは、迷妄の消えた悟りの境地が静かな安らぎであることを指す。これに「一切皆苦」を加えて「四法印」とすることもある。（289字）
- ②
「一念三千」は、天台智顗の講義に基づき撰述された『摩訶止観』に説かれる。思想的背景としては、『摩訶止観』巻第五の観不可思議境において一念三千が提示されており、その直後には地論宗や摂論宗に対する批判が見られることから、唯識思想とは異なる形で、仏法と現実世界の全体構造を一心において統合的に把握する体系を示そうとしたものと考えられる。構造としては、まず「十界」（仏界から地獄界までの十種の境地）を立て、さらに各界が互いに含み合う「十界互具」によって百界が成立する。これに『法華経』方便品の十如是を掛け合わせて千如是となり、さらに三世間（五陰世間・衆生世間・国土世間）を掛け合わせて合計三千世間が展開される。『摩訶止観』では、これら三千世間の全体が、一念すなわち一瞬の心の働きの中に具わると説かれる。（349字）

(2)

① 空海

空海は、804年から806年まで、長安に滞在して密教を学び、日本に中国密教を伝えた。空海は金剛界・胎藏界の両部不二思想のもとにこれを再編し、真言宗を開き、即身成仏と社会教化を宗旨としつつ、文化・教育・社会事業と幅広い活動を行った。(111字)

② ヴァスバンドゥ(世親)

西暦五世紀頃のインドの仏教僧。兄の無著(アサンガ)と同じく、最初は部派仏教(説一切有部)を学んだが、後に無著に感化されて大乘に転向して、唯識思想を確立した。彼の思想としては、アーラヤ識(阿頼耶識)説や三性説とともに、識の転変といった識の流れに関する説が見られる。また、説一切有部の思想を批判的に整理した『俱舍論』が、彼の著作として有名である。(116字)

③ 像法

「像」は、形を似せるの意味であり、「像法」とは、仏の正しい教えにかたどった教えをいう。正法・像法・末法の三時の一つである。像法の時代は正法に続く1000年間(500年間とする説もある)といわれ、唐の慈恩基の『大乘法苑義林章』によれば、仏の教えそのものとそれを学ぶ修行者は存在するが、悟りを開くものはいなくなる時代といわれる。(155字)

④ 『肇論』

鳩摩羅什の弟子の僧肇の著作である。本書は「物不遷論」「不真空論」「般若無知論(附)劉遺民書問 答劉遺民書」「涅槃無名論」の4編と「宗本義」からなり、老荘思想に精通していた僧肇が、鳩摩羅什から学んだ龍樹などの中観派の諸論によって仏教教義の主要な問題を明らかにしたものである。(135字)

⑤ 三階教

末法思想と如来蔵・仏性思想を基盤として隋・唐代に栄えた、信行(540-594)を開祖とする中国仏教の一宗派である。三階教は、仏教のあらゆる教えを、時・処・人に関して三つの階級に分け、現在(当時)は、時は末法、処は穢土、人は破戒邪見の凡夫の第三階であるとし、第三階の衆生のための実践として、あらゆる仏・教えを信仰する普法(普真普正仏法)を唱えた。(167字)

⑥ 四悉檀

仏の説法の言葉を四つの範疇に分けて、相互に矛盾が見られるような場合でも、それぞれの範疇内で言えば真実であるということを明かしたものである。「世界悉檀」は、仏教の究極的な立場から言えば虚妄であるが、世間的な意味では真と認められる事柄のこと、「各各為人悉檀」は、人それぞれの資質や能力・思想などに応じて説かれる真実のこと、対治悉檀は、病に応じて薬があるように、その人の誤った見解や生活態度などを改めて正しい道に導くために説かれる真実のこと、「第一義悉檀」は、仏教の究極的な真実である悟りそのもののことである。(252字)

⑦ 『阿含経』

初期仏教経典を指す。「阿含」とはサンスクリット語・パーリ語のアーガマの音写で、伝承された教説の意味であり、釈尊の直説とみなされた経典を多く含んだ経蔵を指す。現存する阿含経には、大きく南伝と北伝の二種がある。南伝仏教が伝える経蔵は、『長部』・『中部』・『相応部』・『増支部』・『小部』の五部に分かれる。北伝仏教が伝える漢訳『阿含経』は、『長阿含』・『中阿含』・『雜阿含』・『増一阿含』の四種に分類される。(201字)

⑧ 慧思(南岳大師)

天台智顗の師であり、龍樹を初祖とした場合に中国天台宗の第三祖とされる。般若思想の実践者でもあり、『般若経』・『法華経』などの諸大乘経の講説につとめた。彼の著作とされる『立誓願文』には、末法の意識が強く現れており、文献上確認できる最も古く末法意識を持った人物とされる。大蘇山に住していた時に、智顗に法を伝え、晩年は衡山(南岳)にこもった。現存する著作には、『法華経安楽行義』『諸法無諍三昧法門』『随自意三昧』などがある。(210字)

⑨ 神仏習合

神仏習合は、日本の神々が仏教と接触することで成立した思想と儀礼体系である。奈良時代には神を仏の救済対象とし、平安期には神を仏の仮の姿とする本地垂迹説が発展した。中世には山王

神道・両部神道など多様な理論や垂迹美術が展開し、近世まで神仏一体の思想として広く受容された。（132 字）

⑩ 『立正安国論』

日蓮が 1260 年に北条時頼に提出した諫暁の書で、対話形式で災害多発の原因を法然の専修念仏の流布による善神捨国にあるとし、念仏を禁じ『法華経』を弘めれば国が安泰になると説く。また悪法を放置すれば「自界叛逆難」（内乱）と「他国侵逼難」（外国の侵略）が起こると警告する。『開目抄』『観心本尊抄』と並ぶ日蓮の主要な著作の一つである。（163 字）

出題意図：

Intent of Questions：

仏教学を専攻する大学院生として必要な知識を修得しているかを評価すること。